

令和五年度 中学生の「税についての作文」受賞作品

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

命を守る税金

東京都立武蔵高等学校附属中学校

森久保 璃 奈

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

平和への投資

武蔵野市立第三中学校

塚 本 凜々子

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

私たちが学びを得るために

東京都立武蔵高等学校附属中学校

東京納税貯蓄組合総連合会会長賞

ちりも積もれば

東京都立武蔵高等学校附属中学校

吉 川 鳴 海

武蔵野納税貯蓄組合総連合会会長賞

今、必要なことを考える。

東京都立武蔵高等学校附属中学校

長 田 結 乃

東京都立川都税事務所長賞

税の恩返し

東京都立武蔵高等学校附属中学校

仲 野 瑛太朗

武蔵野市長賞

取られるから納めるへ

武蔵野市立第三中学校

堀内 冴笑

武蔵野市教育長賞

幸せの保障

東京都立武蔵高等学校附属中学校

浦尾 陽

東京税理士会武蔵野支部支部長賞

NO MORE 「税金泥棒」

武蔵野市立第五中学校

林 佑樹

一般社団法人武蔵野青色申告会会長賞

どうする税の使い道

武蔵野市立第一中学校

小坂 祐喜

公益社団法人武蔵野法人会会長賞

より良い税の使い道

武蔵野市立第四中学校

田中 琴弓

武蔵野間税会会長賞

税金を正しく使うために

武蔵野市立第二中学校

西山 美里

武蔵野納税貯蓄組合総連合会優秀賞

※作文名・お名前のみのご紹介となります

想いの架け橋、税金

武蔵野市立第六中学校

鈴木梨央

税金で助け合い

学校法人井之頭学園藤村女子中学校

斎藤心晴

税金で未来を買う

学校法人聖徳学園中学校

柏原結

武蔵野納税貯蓄組合総連合会会長感謝状（学校賞）

武蔵野市立第一中学校

学校法人聖徳学園中学校

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

命を守る税金

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年 森久保 璃 奈

私には、十一歳の弟がいる。彼は、今はとても元気な男の子だが、生まれたときはわずか八百四十二グラムの小さな小さな赤ちゃんだった。生まれてすぐに集中治療室に入り、四ヶ月以上入院していた。当時三歳だった私は、弟に会うことを楽しみにしていたが、結局はじめて会ったのは生まれてから二ヶ月以上たってからだった、と母は言う。私も、ガラスケースに入れられた小さな弟を見たときの感動は、今でも覚えている。

税の作文のテーマを考えると、ふと弟の誕生時にはどのくらいお金がかかったか気になり、母に聞いてみた。診療明細を見ると、医療費は総額で千五百万円を超えていた。しかし、両親が実際に払ったのは約十万円だったという。調べてみると、私たちが当時住んでいた江戸川区では、未熟児に対して一定の医療費を負担する制度があった。また、それに加えて子どもの医療費が助成される制度があることもわかった。この二つの制度により、その他薬の容器代、文書料などの費用しか払っていないそうだ。このことを知ったとき、弟の命は税金によって守られたのだと思い、感謝の気持ちが芽生えた。

これを機に医療費についてもっと知ろうと思い、さらに調べてみた。医療費は、「国の歳出の内訳」の社会保障関係費にあたり、二〇二三年では三十二パーセントと、最も大きな割合を占めている。その中の社会保障制度に公的医療保険というものがあり、国民全員が加入し、保険料を支払っている。つまり、私たちの税金が国の医療費の収入源である。この制度では、「自分が医療を受けないと損をしている」と思うかもしれない。しかし、私の弟のように税金で命を救われた人が多くいる、ということをお忘れなでほしい。以前より、前向きに、気持ちよく納税できるのではないだろうか。

医療費は高額だ。私の家のように、本当だったら払えないことも多いはずだ。税金がなかったら、貧富の差により治療を受けることのできる人とできない人で分かれてしまう。今の税金は、人の命を救うことに対して多くを使っている。これは、ありがたいことだと思うから、続けてほしいなと思う。

今、私の弟は年に一回病院に通っている。成長に異常がないか確認する定期検診だ。私についてはいったことがないが、母は「お医者さんが、元気に育ちましたね。」と言ってくれる。「とても嬉しくなる。」と話していた。弟の成長を病院の人たちが喜んでくれている。弟は家族だけでなく、様々な人たちに見守られ、現在お調子者で優しい小学六年生だ。

税金で医療を支え、医療従事者が患者さんを支え、患者さんは頑張る。この構造の基盤にあるものは税金だ。これからも、私は弟を救ってくれた病院の方々と、そして税金に、お礼を言い続けたい。「弟を救ってくれて、ありがとう。」と。

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

平和への投資

武蔵野市立第三中学校 三年 塚 本 凜々子

広島生まれ、広島育ちであった私の曾祖母は、昨年九十六歳で他界した。原子爆弾が投下された一九四五年の八月六日午前八時十五分、当時十九歳だった曾祖母は、家の庭を掃除していたそうだ。木の家は一瞬にして倒れて、近所では燃え盛る炎の中から「助けて」という叫び声が、何度も何度も聞こえたという。

それから何年かして、曾祖母は被爆者健康手帳というものを申請した。この手帳があると医療費が無料になったり、支給要件に合わせてお金が支給されたりするそうだ。曾祖母は、爆心地から二キロメートル以内で、被爆したため、毎月三万五千七百六十円が支給されていたという。

どこの団体がこのような支援をしているのだろうかと疑問に思い、曾祖母の娘である祖母に聞いてみると、これらの支援は全て国が集めた税金によって行われていることを教えてくれた。特別被爆者支援制度という制度によって、昭和三十五年から援護が行われているらしい。

私は今まで税金にあまり良い印象がなかった。私の両親は所得税や住民税の話をしていて、私が少ないお小遣いの中で買い物をするときに納める消費税は嬉しいものではなかった。だが、被爆者の援護が税金でなされていることを知り、税金について詳しく調べてみると、生活に困っている人の助けや、障害者の支援などに使われていることが分かった。私たちに身近なところで言うと、道路や上下水道、橋などを作るときにも使われているという。これらのものは私たちの生活に必要な不可欠であるが、自分たちだけで賄えるものではない。そのため、私が当たり前に過ごしている日々は税金のおかげで成り立っているのだと感謝の気持ちが生まれた。一見マイナスに見える税金も回り回って自分に返ってくるのだ。

曾祖母は亡くなる直前まで元気に暮らし、私が訪ねるといつも笑顔で優しく迎えてくれた。その度に、折り紙で一緒にたくさんのお鶴を折ったことをよく覚えている。

日本は今でこそ平和な世の中になったものの、悲惨な過去があったことを決して忘れることなく、被爆者の思いや願いをこれから先の未来に繋げて、将来生まれてくる子どもたちに明るい未来を過ごしてほしい。今日(こんにち)、被爆体験者の平均年齢は八十五歳を超えているという。高齢化が進む中、国民全員で税を納めて、被爆当時を知っている最後の世代である人々を守り、もう二度とそんな恐ろしい出来事を起こさないことが重要となってくる。税金は、未来への投資だ。これからは、私の納める税金が平和な未来を創造するのに少しでも力になることを願い、税金を納めたい。

東京国税局管内納税貯蓄組合連合会優秀賞

私たちが学びを得るために

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年

私は来年留学に行く予定だ。その時に使う制度が次世代リーダー育成道場、東京都の留学制度である。国内事前研修で様々なことを学び、その成果をもって留学にチャレンジする都立高校生等を支援するプログラムだ。その際に使われる東京都の税金は一人当たり約三百万円。決して安くはない金額である。その恩恵を受けさせていただくと考えたときに、国や東京都の教育費はどのような内容なのか気になり、調べてみた。

まず、国の教育費についてだ。国税庁のホームページによると、日本の教育費は大きく分けて二つの役割がある。学習に必要なものの購入や支援と新しい研究や開発だ。一つ目の学習に必要なものの購入や支援では公立の小中学校の場合税金が、教科書や教室にあるパソコン、実験器具や体育用具などに使われている。先生の給料としても使われている。私立の学校の場合、補助金として税金が使われている。二つ目の新しい研究や開発では、税金が将来、私たちの生活の役に立つために宇宙開発や科学技術の研究をするときに使われている。

次に東京都の教育費についてだ。平成二十三年度の歳出の内訳で教育と文化が約十六パーセントを占めた。教育と文化とは私たち都民がより良い教育を受けることができるように使われている税金のカテゴリーだ。税金の内訳の中で最も多くを占めていた。その中で約七十五パーセント、歳出の十二パーセントを占めるのが教育費だ。教育費の約五十五パーセントが公立の小中学校の運営に使われている。

以上のことから、日々当たり前のように享受している学校生活が当たり前ではなく、莫大な費用がかかって初めて成り立つものだということを学んだ。教育は人間が尊厳をもって生きていくために必要なものだ。平和社会をつくるために欠かせないし、継続的な経済を発展させていくためにも不可欠だ。世界では私たちと同じくらいの子供たちが家事や労働をして生きていくために必死になっているところもある。また、水汲みによって勉強をするための時間がとれなかったり、戦争やジェンダーの問題により教育を受けられなかったりする子供たちもいる。そのような人もいると理解した上で、私たちが享受できる学校生活でどのような気持ちで過ごしていくかが大切だろう。

私たちの生活は税金で支えられている。日本のこのようなシステムに感謝して日々を過ごすか、課税に文句を言って過ごすか。自分の行いひとつで日々の過ごし方が変わってくると思う。私は日本の学校で知識を得ることができ、次世代リーダー育成道場といったプログラムで得難い経験をすることができ、このような環境に日々感謝して、生きていきたい。

東京納税貯蓄組合総連合会会長賞

ちりも積もれば

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年 吉川 鳴海

私は公立の学校に通っている。そのため、教育費の多くが税金で賄われている。しかし時々、税金の無駄遣いなのではないかと思うことがある。

毎年四月、進級する際に国語、英語、社会などを中心として新しい教科書がたくさん渡される。それは新しい学習内容への興味と期待に胸を膨らませる瞬間である。しかし、私は毎年疑問に思うことがある。それは使わない数学と理科の教科書をなぜ受け取るのかということだ。私の学校は数学と理科の教科書は別で購入するため使わないのだ。ある人は「貰えるものは貰っておきなさい。」と言い、ある先生は「折角貰ったのでたまには使いましょう。」と無理矢理使おうとする。私はこのような光景に出会う度、無駄だと思う。

私は教育のためにどれくらいの税金が使われているのか調べた。すると、国の歳出における文教及び科学振興費は総額五兆四千五百五十八億円、そのうち教科書の配布に一部が割かれる教育振興助成費の割合は四十二・六パーセント、金額にして二兆三千五百四十四億円であると分かった。これ程多くの金額が教育のために使われていると知り、私はとても驚いた。しかし同時に学校で配られる使われない教科書の配布を止めればもっと削減できるのではないかと考えた。まず教科書本体の価格、そしてそれを運ぶための運送料、それが中学校三年分だから数十万円の節約になる。そして、同じように無駄になる教科書を配っている学校が他にもあれば、この金額は何倍にも増加するだろう。また、使われない教科書に無駄な税金がかかるのは配るときだけではない。我々学生がそれらを処分する際にも、税金によって運営されているごみ処理場が使用される。

今回私は「学校の教科書」を例として税金の無駄について考えた。この他にもきつと税金の無駄はあると思う。細かいところを削ったところで数万円程度の僅かな節約にしかならないと思うかもしれない。しかし、たった一冊数百円程の教科書だとしても、それが集まり積み重なって数十万円まで膨れ上がっているのだ。近年、税金が足りず、増税することと苦言を述べる人々の姿がテレビで度々放送される。当然、社会は刻一刻と変化するものであるから、実際に必要経費は増え、それだけ税も必要なだろう。しかし、ここで増税されることを仕方ないと諦めるのではなく、自分の周りに国庫を圧迫する原因となっているものはないか、と考えてみてはどうだろうか。一冊数百円の教科書が数十万円に化けたように、私達一人一人の意識の変化が積み重なれば、社会の大きな変化に化けるかもしれない。

税に関して多くの課題が存在するこの社会、私達の行動によって、少しでも明るい未来が訪れることを祈っている。

武蔵野納税貯蓄組合総連合会会長賞

今、必要なことを考える

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年 長 田 結 乃

もったいない。何かに対してそう感じたことはないだろうか。私は中学校に入学してから三年間、身に染みて感じる “もったいないこと” が一つある。それは、いつものように余ってしまう給食だ。

私たちは日々、登校日には学校から給食が支給されている。それだけでもありがたいのに、今はそのありがたさを実感できないものになってしまっていると思う。なぜなら私は、今までクラス全員が残さずに完食し、最後にすべての食器が空っぽになったというところを、数えられるほどの回数しか聞いたことがなかったからだ。

調べてみると、今はまだほとんどの学校には保護者から給食費が払われているが、無償になっていくところもだんだんと増えてきている。しかし無償というのは、保護者が「給食費」を払っていないだけであって、その代わりすべてが国民の税金で賄われているということだ。また、払われている給食費も実際は材料費だけで、人件費はもちろん税金で支払われている。そんな、税金で成り立っているといっても過言ではないような学校給食を、軽い気持ちで残してしまうのはどうだろうか。

この地球上には、きちんとした食事さえできない家庭もたくさんある。そんな世界の問題を学ぶ場所でもある学校で、多大な食品ロスを毎日身近に感じてしまっただけはないと思う。単純に考えて、残るといえるのは多いからである。それをなくすためには、もともと作る量を減らせばいいだろう。残ってしまう給食が減るだけでも、その後処理する必要もないため、その分人件費がより節約されるし、何より環境にも良い。私は、このように余ってしまう給食に充てていた分の税金は、国の税の歳出の一つである「経済協力費」にまわせばいいのではないかと考える。このお金は、発展途上国の支援のためであるから、残って廃棄されてしまう給食よりも断然価値のある食事を、少しでもこの税金で支給できれば効率がいいのではないか。

給食の量をはじめから減らすことで、おかわりが自由にできなくなったり、子供の成長が妨げられてしまうというのなら、学校への昼食の持ち込みを可にすればいい。それなら、その日の給食のメニューと照らし合わせ、自分が食べられる分を予想して各自で準備することができる。人によって食べられる量も違うのだから、こうすることによって完食するまで終われない、という給食の文化も減っていくだろう。

多くて余るものがあり、それが少なくする必要としている人がいるなら、ちようど良く平坦になるように、充てる税金を調整すればいいのである。知らないうちに消えていく税金は必要ない。それに気が付いた時に、もっと必要としている、もっと税金を使用するべき別の用途を探して、より効率的な税の負担の仕方に変えればいいのではないか。

東京都立川都税事務所長賞

税の恩返し

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年 仲野 瑛太郎

私は先天性部分無歯症だ。生まれた時から永久歯が人より少なく、虫歯、歯周病、審美性などに悪影響を及ぼす可能性がある。私は足りない歯の数が多く、より深刻な影響も考えられた。現代の医療でも完全に治すことは難しいが、歯列矯正などの治療を行うことで将来的にかかる負担を減らすことができる。しかし、矯正治療は大きな痛みが伴う。幼い頃の私にとっては決して軽くない負担で、いつも不平不満を漏らしていた。

ある日、矯正治療にかかる費用について知った。その額は私の想像の何倍も高く、どのようにしてその費用を負担しているのか疑問に思い、両親に聞いてみた。すると、確かに治療の費用は高額だが「保険」が適応され自己負担が軽くなること、その財源には一部税金が使われていることを教えてくれた。私の治療は、両親とお医者さんだけでなく、会ったこともない沢山の人の支えによって実現している。そのことを知った私は、治療に対し前向きに取り組めるようになった。また、私の治療を助けてくれている税金についても興味を持ち、調べてみることにした。もし保険が無ければ、この治療を受けられなかったかもしれないからだ。

人は誰しも病気や怪我にあう可能性がある。次はあなたの番かもしれない。そうなったときに助けてくれるのが保険だ。私の場合は自己負担が三割で済んでいる。これは公的医療保険制度によるものである。この制度は全て国民が助け合うことによって、誰もが安心して医療を受けられるようにするためのものだ。この制度の財源は主に保険料と公費、つまり税金で賄われている。外国にはこのような制度がない国も存在し、日本の医療保険制度は、非常に水準の高い社会保障制度だと言われている。税金の用途はこれだけではない。私はいままで税金に対し、漠然とマイナスなイメージを持っていた。しかし、詳しく調べれば調べるほど、税金が私たちの生活を至る所で税金が助けてくれていることが分かり、税金に対する見方が変わる。学校や公園、普段何気なく歩いている道路にだって税金が使われているようだ。

日本には古くから「結」という言葉がある。これは日本の農村で生まれた、協力して労働をし、助け合って生きていくという考えだ。形は違えども、税金は現代の「結」といえるのではないかと思う。私達は一億人以上の助け合いの輪の中で生活しているのだ。

私の将来の夢は歯科医になることだ。歯科医として、矯正治療などで苦しんでいる子供たちの支えになりたいと思う。それだけではなく懸命に働き、きちんと納税をしたい。今までも、そしてこれから、私は税金を支えられながら成長していくのだろう。納税をし、その税金が誰かの助けになるのなら、それが私を支えてくれた人たちに対する最大限の恩返しになると思うからだ。

武蔵野市長賞

取られるから納める

武蔵野市立第三中学校 三年 堀内 冨笑

私は、学校の授業で聞いた「税金は取られるものではない」という言葉が印象に残っています。税金は払うものであり、国に取られるものだと思います。

例えば、普段買い物をする時に商品の値段にプラスされる消費税があります。多くの人が一度は「消費税は何に使われているの?」「消費税率がだんだん上がっているのはなぜ?」などと、疑問を抱いたことがあるのではないのでしょうか。

まず、消費税の使用用途についてですが、消費税法第一条に「毎年度、制度として確立された年金、医療及び介護の社会保障給付並びに少子化に対処するための施策に要する経費に充てるものとする」と定められています。具体的には、医療費、介護費用、子育て支援、年金の財源として使われていることです。私はこのことを知り、消費税に対する考えが、商品代にプラスで払うというものから、多くの日本国民の現在、さらには未来のために納めるというものへ変わりました。

次に、なぜ消費税率はだんだんと上がる一方なのでしょう。その理由は、日本で問題となっている少子高齢化が関係しているようです。現在、日本では少子高齢化に伴い、年金や医療、介護などの社会保障費用は急激に増加しています。それらのお金を払うために公債金に頼っているため、消費税率を上げて多くのお金を手に入れる必要があるのです。日本の消費税率は三%からスタートし、その後五%、八%、十%と増えているため、「もうこれ以上は上がらないでほしい」という人も少なくはないと思います。ですが世界的に見ると、消費税率二十%を超える国がいくつもあるため、日本は比較的低い方だと言えます。実際、二十五%のスウェーデンは日本より経済が安定していて、幸福度が高いと言われています。なので私は、日本も消費税率を上げて良いのではないかと考えました。

しかし、ただ消費税率を上げるだけでは、あまり意味がないと思います。もちろん、急に十%から二十五%になると、食料品や生活必需品などのほとんどの商品が値上がりするため、税が人々の大きな負担となるのは間違いないでしょう。そのため、少しずつ税率を上げることが重要です。私はそれに加え、消費税の使い道を少し変えてみると良いのではと考えました。日本もスウェーデンのような税の使い方を参考にすれば、社会全体がより良くなりそうだと感じました。また、議員選挙の投票の際に、投票用紙に議員名だけでなく、「税金がどう使われるべきか」などの意見を記入する欄を設け、それを国民の意見として政治に反映させてみて良いのではと考えました。

これらのことから、日本国民の税に対する考え方を学習などを通して「国に払う、取られる」から、「将来のために納める」へと変化させていくことが大切なのだと思います。

武蔵野市教育長賞

幸せの保障

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年 浦尾 陽

なぜ、税金は社会の幸せを保障できているのか。答えを導いていこうと思う。

もしも税金という仕組みがなくなってしまうたら、世の中はどうなってしまうのか。これに関する資料を見て、「消防車を呼ぶのも有料で、そのときのお金は全て自己負担になる」とわかった。現在は、消防車の運営にかかるお金は税金であり、それは多くの人々から集めたものだ。だから、利用者にかかるお金の負担は軽くなる。このことから、税金の仕組みがあることで、人々は実際にかかる金額より安く、サービスを受けられる。人はいつ事故や火事に遭ったり、病気になったりするかわからない。いつでも低価格で安心、安全な生活を送れることは、幸せが保障されていると言えるだろう。このように私は考察した。これを父に説明してみた。

父は言う。税金は、皆に低価格でサービスを提供しているわけではない。そして、私の考察に対して次のようにも説明してくれた。君の考察では、当事者が納めてきた税金だけでは払えないだろう金額で、サービスを受けられることを低価格と表現している。また、「幸せが保障される」状態とは、低価格で重要なサービスを受けられることにより、自分に利益が生まれる、ということだろう。すると、高額な納税をしている高所得者や、一生でサービスを受けなかった人は、利益が出ないことになる。すなわち幸せが保障されていないことになるのではないか。父から指摘を受け、私の考察に矛盾があったと気が付いた。

父は、低価格という考え方は税金の仕組みを誤解していると説明してくれた。私はこの説明に納得するまで大変時間がかかった。サービスを受ける対価として税金を支払うわけではない。納税の対価として、金額の差異に関係なく、皆が平等に公共サービスを受けられることがメリットなのだと理解した。人々が本当に困ったとき最も大切なことは、助けてもらえるかどうかである。サービスを受ける時にかかる負担を考えるより、そもそもサービスを受けられるかどうかが大切なのだ。税金があれば、サービスを受けられないかもしれないという不安を払拭することに繋がる。これらを踏まえ、皆が同じ土俵に立ち、サービスを享受できることは、税金が幸せを保障できていると言える最大の理由だ、という答えに辿り着いた。

私は、父との議論を通して、税金は支え合いだと思った。自分が納めた税金は、知らない人のためになっているかもしれない。ただし、いつ自分がサービスを必要とするかわからないのだから、誰かの税金により自分が助かる可能性もあるのだ。私は、将来納税者になった暁には、「自分や大切な人がサービスを必要とした時に、それまで税金を払ってきたからこそ、誰かの税金が助けてくれる」と信じて税を納め続けたい。皆にとって情けは人の為ならずで、税は幸せを保障している。

東京税理士会武蔵野支部支部長賞

NO MORE 「税金泥棒」

武蔵野市立第五中学校 三年 林 佑 樹

私はこの作文を書くにあたり、私たちが払う税金がどのように使われているのかわらなかつたので、学校で配布されたタブレットを使い国税庁のホームページを調べました。そのページの中で、私は興味深いことを知りました。それは、警察官は税金のおかげで私たちの安全を守ってくれているということです。警察官は私にとって大切な恩人です。私がまだ幼稚園児の頃、家の鍵を持っておらず、両親も仕事で家にいなかったため、家に入らなかったことがありました。私は途方に暮れ、近くの商店街をさまよっていました。そこで声をかけてくださったのが、警察官の方です。泣いていた私に、「大丈夫？お母さんは？」と優しく接してくださり、最終的に母が迎えに来るまで一緒に待ってくださいました。あの時あの警察官に会っていなかったらと考えると、恐ろしくてたまりません。私は現在の生活が税金によって支えられていることに気付かされました。

一方で、税金のことを調べるうちに、警察官をはじめとする公務員に使われる税金に対する厳しい意見があることも知りました。特に、「税金泥棒」という言葉は、見ていてとても心が痛くなりました。私は、それらの意見は税金の用途を知らないが故に出てきてしまうのだと感じました。また、それと同時に税金の使い先をより多くの人に知ってもらいたいと思いました。正当で真つ当な用途で使われていると知れば、このような意見も減るはずです。

その上で、北海道にある鷹栖町の定例会の案内をニュースで見えた時、私はそのアイデアに驚きました。そこには、まるで家電量販店のチラシのようなデザインと、写真とともに用途に対する金額が書いてありました。ユーモラスなデザインによってたくさんの方の目を引きながら、伝えたい情報を確実に伝える。私は、「税金の用途を知ってもらう」という目標の上で、この方法はとても効果的だと思いました。実際に、この方法は「これなら関心を持てる」とインターネットを通して話題になっていました。

「税金は国民によって支えられ、国民の生活を支えている」このように言うのは簡単です。しかし、実のところ、どのようにして私たち国民の生活が支えられているのか、それは知られていません。事実、私がそうであったように。国民全員が税金に関心を持つ社会を作るため、また、これ以上「税金泥棒」を生まないため、私は、その一歩目として税金の用途をより全面的に伝えることが大切だと考えます。

どうする税の使い道

武蔵野市立第一中学校 三年 小坂 祐喜

父が税金対策だと始めたふるさと納税では、よく意味もわからず、御礼品の各地の果物や様々な嗜好品をただ堪能するだけだった。その中の一つで、つくば市にあるサイバーダインスタジオにて、作業現場で活躍するロボットスーツHAL腰タイプ作業支援用装着体験をしてきた。これは、作業者の腰部にかかる負荷を低減することで、腰痛を引き起こすリスクを減らす装着型ロボットだ。まず、最初にこの体験で驚いたのは研究施設のような場所へ行くと思像していたが、なんとショッピングモールで様々な店の横に並んでいたということだ。体験では、想像以上の効果で画期的な機械だと思った。しかし、それには大きな問題があることを知った。研究開発や機械の導入に莫大な費用が掛かることだ。スタジオが人目の付くところにあるのは、少しでも興味を持ち、支援してくれる人が見つかるようにするためだったのかと考えた。私は、体験が終わった後も何か支援する方法はないのかと考えた。そして、この体験を行うきっかけにもなったふるさと納税に行き着いたのだ。

ふるさと納税について、調べると様々な気づきがあった。ふるさと納税は生まれた故郷や応援したい自治体に地域の特産物やサービスを購入することで寄付ができ、使途も指定できる制度だ。手続きをすると、寄付金の内二千円を超える部分は所得税の還付、住民税の控除が受けられるというシステムだ。「さとふる」というサイトをみると、地域の挑戦を応援するクラウドファンディングや災害支援寄付、コロナウイルス医療費寄付など、様々な方面にわたり、多くの寄付が集まっているのがわかる。私は、ふるさと納税の一番の魅力は、税金の使途を自分で決められることだと思う。普段、私たちが納める税金はその使い道を知ることができない。たとえ、それが自分の身近な道路や公共施設に使われていたとしても、それに気づくことはできないのだ。つまり、これは公共の施設を使う人みな、それが誰のどんな努力の末に提供されたものなのかわからないということだ。私の公立中学校は、昨年度校舎が仮校舎に移った。新校舎建設には、数十億という莫大な費用がかかるそうだ。そして、この費用はすべて税金から賄われる。同様に様々なものが税金で賄われる中、その出資源を知らなければ、たとえそれらに多少傷がついても気にも留めないだろう。

多くのクラウドファンディングやHALのように優先すべき税金の使い道は多くある。また、各々の考え方や暮らし方、生き方によって、税金の使い方についての優先順位は様々だ。税は、自分が支援すべきもの、本当に支援を必要としていると思うものに、税金を納めることのできるふるさと納税のようなシステムが更に必要だと思う。義務として税金を支払うのではなく、一人一人が自ら税金を納めるそんな社会を目指していきたい。

より良い税の使い道

武蔵野市立第四中学校 三年 田 中 琴 弓

2019年、消費税が8%から10%に増税されました。それまではあまり気にしていなかった税金ですが、テレビや新聞で増税について大々的に取り上げられており、よく目にしてきたことから、税金は具体的にどのようなことに使われているのか気になり、調べてみました。

調べてみると、税金は私たちの生活に大きく関わっていることがわかりました。水道や道路、信号などの整備や、陸上競技場、総合体育館などの施設づくりなどです。そして、私たちの通っている学校にも税金が使われていることがわかりました。また、こういった公共設備だけでなく、私たちの医療等に関する面でも「社会保障関係費」という税金が使われていることがわかりました。社会保障関係費は、歳出総額の約32%という大きな割合を占めています。なかでも医療費や介護給付費、年金を支払うために約78%が使われています。ということがわかりました。しかし、日本は今少子高齢化が進んでいるため、将来的に今のままでは足りなくなるのではないかと思われました。社会保障関係費を増やすためには、さらに税負担を増やす必要があります。ただ、日本の税負担は他国と比べるとかなり重くなっているため、これ以上増やすのは難しいでしょう。だから、政府や国会で使用される税金の無駄使いを無くしたり、軽減税率を考える必要があると考えました。具体的には、数が多い国会議員の数を減らしたり、食料品にかかる消費税を3%にし、高級車にかかる消費税を20%にするなどです。少子高齢化が進んでいる今、子育て対策や高齢者の増加の対策に税金を多く使用するほうが良いと思われました。また、日本は他の先進国に比べ教育に関する支出の割合が小さい傾向にあります。そのため、小学校から大学までの教育費を無料にするなど、教育費に関する税金の支出をもっと増やす必要があると思いました。4年前の消費税の増税も、当時は反対する声も多く、私も不満に思いました。ですが、税金の使い道をくわしく調べ、見知らぬ人々の暮らしを支えていたり、私たちの生活の助けになってくれているかも知れないと知り、感謝すべきだなと思いました。

私は、この作文を書くにあたり税についてたくさん調べ、知識を深めることができました。これから先、大人になると税と関わるのがどんどん増えていきます。だからこそ、税についてしっかり理解し、正しく納め、その税金が正しく使用され、少しでも社会の役に立つことを願います。

税金を正しく使うために

武蔵野市立第二中学校 三年 西山 美里

私は「てんかん」という病気を持っている。「てんかん」というのはてんかん発作を繰り返し起こす病気だ。体がしびれたり、意識を失ったりすることがある。私が発作を起こしたのは一度だけだが、今も定期的に通院している。今は症状が落ちついているので薬は飲んでいないが、私は小学校の四年生から六年生までてんかん発作を抑える薬を飲んでいた。その薬について母から驚くことを聞いた。当時、私が飲んでいた薬は一錠七百円もするというのだ。私は、朝と晩に一錠ずつ飲んでいたので一日だけで千四百円。三年間分を計算すると百五十三万三千円にもなる。もしも税金がなく、医療費がすべて自己負担だったらこのお金を私の両親が払っていたのだ。

そのこと知り、日本の医療費の自己負担比率について調べてみると十二パーセントととても低いことが分かった。国の歳出のうち五十四兆円がこの医療費に使われているようだ。よく「税金が私たちの生活に還元されていると思えない。」と言っている人を見る。消費税が引き上げられたときもそのようなことを何度も聞いた。しかし、実際には私たちが健康で過ごせるようにするために税が使われている。私たちがすべきことは「税金をあげないでほしい」ということではなく、何に税金が使われているのか、目的はなんなのかを知り、それに沿った使い方をすることだと思う。そうすることでもっと多様なことに税金を使うことができ、私たちの生活はより豊かになるのではないだろうか。

医療費の負担だけでなく、私たちが通っている学校、普段使っている通路、警察、消防にも税金が使われている。学校があるおかげで私たちは正しい知識を得ることができ、様々な視点で物事を見ることができる。道路がしっかりと整備されているから、安心して目的地までたどり着くことができる。警察や消防があるから安心して生活を送ることができる。このように税金は私たちの生活になくしてはならないものだ。だからこそしっかりと税金について知り、私たち一人ひとりが「税金が使われているものを正しく利用する」という意識を持って行動することが大切なのだと思う。

三年後、私は税金を納めることになる。その時までにもっと税金の制度について知り、自分と周りの人たちの生活をより良いものにするためにしっかりと責任を持って税を納めたいと思う。